
小説2

小早川

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

小説2

【コード】

N09490

【作者名】

小早川

【あらすじ】

小説1の続きです。1から読んでもらったほうがいいと思います。

「おはよう、鈴木さん」

挨拶など交わしたことの無い佐藤伊織が、ナチュラルにそう言った今日は月曜日で、明日学校へ行ったら挨拶くらいはすべきだろうなどと逡巡していた私ににこやかに微笑んだ。「お、おはよう」と返事は果たしてナチュラルだったか定かではないが、ひとまず懸案が解決したと胸をなでおろし、と同時にまた違う問題が頭をもたげた。「昨日はありがとう」くらいのことは言うべきだったのではないか。それで私は再びぐずぐずの思考の海に旅立つのだ。

「ほら、あの女装の子、いつもこの時間あそこにいるけどよっぽどお菓子が好きなんだろうねえ」

パートのおばさんが噂話に花を咲かせながらイカの皮をひん剥いた。私がバイトする鮮魚売り場は、お客さんからの注文を受けてその場で魚をさばくのだが、これが売り場の真ん中であつてぐるりと透明のアクリル板で囲まれている。だからお客さんからこちらがよく見えるように、ここからも店内の様子がよく見えた。確かに示された場所を見れば、外国製のかわいらしいお菓子が並んだその先にナチュラルにテングロンハットをかぶった佐藤伊織がうろろしていた。そうか、と私はブリを取り落としそうになりながら膝を打つ。甘いものなら私にも一家言ある。

「これ、気持ちなんだけど、この間はありがとう」

バイト帰りのテングロンハットを捕まえて、その手にマカロンを押し付けた。怪訝な顔をした佐藤伊織に、畳み掛ける。

「佐藤君、甘いもの好きなんじゃないかと思って、ここのマカロンおいしいし」

「ありがとう、鈴木さん、けど、どうして俺が甘いもの好きに見える

たの？」

「だって、ほら、あのお菓子売り場によくいるでしょう？」

そう言っていると気まずそうに、口元へ手をやった。

「結構目立った？」

「いや、あのね、私は気付かなかったんだけどパートの人がそう言
つててさ」

「そっか……、うん、ありがとう」

佐藤伊織はナチュラルでビューティフルな笑顔を浮かべる。私は
それほどナチュラルでもない笑顔で「それじゃあ、また」ときびす
を返す。二、三歩行きかけた私の背中に、佐藤伊織が声をかける。

「鈴木さん、魚さばくの上手だね」

一瞬何を言われているか分からないまま振り返る。

「いつも上手だなあと思ってたんだ、いつも」

それだけ言っていると、赤いチェックのミニスカートを翻して、佐藤伊織
は駅に向かう雑踏にまぎれていった。それで私は三度目のぐずぐず
の思考の海に旅立つ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0949o/>

小説2

2010年10月20日18時42分発行